

中村善策作風景画

小樽の風景は多くの芸術家にインスピレーションを与えてきましたが、特に中村善策（1901 年-1983 年）の作品といえば小樽を思い出します。中村は鮮やかな色彩と生き生きとした構成を特徴とするスタイルで、生涯を通じて故郷の風景を描き続けました。山や海は彼の作品に共通するテーマです。

西谷家は船主で小樽初の倉庫業を興しました。彼らは中村が 10 代前半の頃からその才能を認めていました。学業を修めた後は西谷家のために働き、夜は小樽洋画研究所で若手芸術家たちとともに美術を学びました。

1924 年、中村が専門的に美術を学ぶために東京に移る準備をしていたとき、西谷家は中村が絵を描くことに集中できるよう小樽の小高い丘にある別荘を半年間貸し与えました。20 代の頃中村はフランスのポスト印象派の画家ポール・セザンヌ（1839 年-1906 年）の作品に出会い、インスピレーションを受けて同じような幅広い筆致と鮮やかな色彩で小樽の風景を描きました。1925 年、日本で最も権威のある美術品展の一つである東京の二科展に彼の作品が入選しました。

彼は毎年故郷に戻り、小樽が急速に近代化し、自然環境が変化する様子を描写しました。中村の戦前の作品の多くは 1942 年の東京大空襲で焼失しましたが、相当数が市立小樽美術館中村善策記念ホールに展示されています。